

1945年、昭和20年は、日本史でどのような年だったのだろうか。なかでも、7月26日に即、ポツダム宣言を受諾していれば投下はなかっただろう2つの原子爆弾が破裂したその後の日本の1945年8月15日は、どういう意味がある日だったのだろうか。それは朕（昭和天皇）の肉声によって、国民（当時の臣民）にラジオ放送で、今日の紛争原因にも連なる愚策を弄した拳句にどうしようもなくなってポツダム宣言を受け入れ、戦争相手の連合国に無条件降伏したと、「帝国の現状」が伝えられた日である。敗戦当事者たる日本では、この日を終戦記念日あるいは終戦の日と言って、戦勝国でもないし第三者でもないのに、ことばを巧みに操り、記念したり戦争が終わったと称し、過去から学ぶことを終わらせている。至る所で散見されるこのようなことばの使用は、言語に絶する恐るべき結果を忘れないようにするためではなく、少しはそうでもあると思いたいが、福島第1原発事故と同じく、これは、「民族の滅亡を招来する」かのような一大事をなかったことにするための用語法だ。

8月の寺報の編集後記で、明照さんは「終戦といって終わらせるのではなく」と、書いてくれている。そう、まさに終わらせんがための「終戦」なのだ。「終戦」は、過去に習わん・・・「習いはせん→しゅう（習）はせん→しゅうせん→終戦」と言っても言い過ぎじゃないだろう。本来ことばは、現実を私たちが理解できるように切り取る働きがある。が、私たちは、そのようなことばの性質を利用し、あるがままの現実をその時々自己都合に合わせて受け取るお目出度い傾向にあるのではないか。現状の客観的分析よりも、希望的観測に終始する。苦しいから現実を直視せず、頭の中にしかない幻想を糧にして生きようとする。このような生き方は、ほとんど保護者の養育下にある子どもならある程度許されてもおとななら生き難い。厚木飛行場にコーンパイプをくわえてタラップを降りる写真でも知られる連合国最高司令官のダグラス・マッカーサーは、アメリカでの講演会で日本人のことを「まだ12歳の少年だ」と言ったようだが、今もまだ、そうかも知れない。いや、小学生ではなく、ある意味、自分の世界だけで生きる幼児と言ってもいい。一時経済成長はしたが、人間的な発達を怠った。戦争に負けたから従っただけで、占領政策も外部圧力がなくなると、検証なく看板だけはそのままに中身を変質させた。その反動だろうか、「12歳の少年」から、さらに世間知らずの幼児へと退行してしまった。

日本では、「終戦」の日を1945年8月15日としている。しかし、これは公式に朕が、臣民に対してラジオ放送で、負けを認めた日である。だから、敗戦国日本の内向きで勝手な命名であって、国際法上、もし「終戦」と言うなら、東京湾沖に停泊するアメリカ海軍の戦艦ミズーリ号の甲板上で、重光葵外務大臣と梅津美治郎陸軍参謀総長が降伏文書に署名した1945年9月2日、この日だろう。「終戦」と言うにしても、世界の認識からずれている。対外的に通用する9月2日は、降伏文書に署名した屈辱的な日だから、忘れないし記念などしたくない日なのだ。したがって、ほとんど秘密のベールに包まれたまま降伏だけが臣民に、上の上から有り難く申し渡した日が記念する日として選ばれた。

この日以降の日本は、自然環境を破壊しつつ幼児化も一因である経済成長を果たし、過去の敗戦や占領統治された他諸国に比べて、日本人は新しい価値観に素早く適応したと煽てられるが、精神的に分裂し屈折し、いろんな物がある代わりに本来の豊かさを失った日本だった。降伏したからの占領政策の受容ではなく、また、特殊な用語法によって主権者たる国民を騙すことなく、私たちにいい近代化民主化への道があるはずだし、そのような道を歩みたいものだ。歩み始めるのに、これからでもけっして遅いということはない。